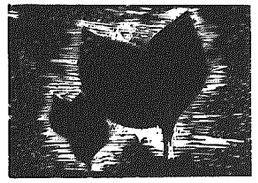
何をボランティアと言うのか。

特集 私にできること③



考えてみませんか

戦後とともに現在の福祉制度の基本ができたのですが、既に四十年がたちました。三十年代までは生活保護、四十年代の高度成長期は福祉は与えるものといわれました。近年、国の財政難から福祉制度の補助率の引き下げや高齢化社会の到来、生活水準の向上など様々の変化があり、福祉の見直しが始まっています。その中で一つの方向として考えられているのが、ボランティアを中心とした福祉です。といっても解決しなければならない問題がたくさんあります。それらを出席者の観点から話し合っていただきたいと思います。（司会・五十嵐広報担当あいさつ）

座談会出席者

菊地八重子さん

7年前に役場の保健婦を辞め、現在ボランティアサークル・つえの会会長。「小さなことでも助け合っていければ」

片岡美和子 専門員

（社）黒埼町社会福祉協議会に昭和60年から勤務する専門員。社会福祉主事。「福祉の基本はよい隣人になること」

宗村　行雄 課長

役場住民福祉課課長。「国や自治体の役割は大きい。しかし、すべてを解決できない。町民が参加してこないと」

行政の肩代わりでは

――昨年の十月に地域福祉・在宅福祉サービス事業に取り組むために、初めて推進委員会を開いたとき、ボランティアが行政の肩代わりをさせられては困るという意見が多く出ました。この辺から。

片岡　社会福祉協議会でも県の補助金がきたからやるといったこともありましたし、事業の方法とか考え方が全くわかりませんでした。

でも、ボランティアが肩代わりと受け取められてはいけない、違うものだと理解してほしいと思いました。

宗村　肩代わりと言うのもわかります。町はこれまで全くと言っていいほどボランティア関係の事業をしていませんから。委員が本来役場のやる仕事までボランティアにさせるのではと警戒するのも無理はありません。しかし、一年間、この事業を進めてみて、ボランティアが行政の肩代わりというケチなものではないと実感しています。

菊地　そうです。わたしどもつえの会も自発性を最優先させなければボランティアなどとてもできるものではないことがわかりました。

片岡　昔はボランティアと呼ばれないボランティアがあったと思います。隣近所で助け合うとか。お年寄りをいたわるとか。推進事業で募ったボランティアは、お年寄りの話し相手や少しの間看護している家人に休んでもらうことが目的です。ですから、行政の肩代わりというより家庭の肩代わりなのかもしれません。

菊地　高齢化が急激に進んでいますし、なんでも役場がやれるものでもないでしょう。ボランティアが行政の肩代わりでないとわたしが思うのは、わたしたちはお手伝いできる場があったら、お手伝いをさせてもらおうと思っているからです。ただ、役場はボランティアを援助する姿勢を見せてほしいのです。勝手にやりなさいでは困ってしまいます。

宗村　その点は十分に応援します。ボランティアは社会の流れの一つのようです。地域社会を成り立たせるためにどうしても必要になってきたのではと思います。

具体的に何をすれば

――具体的にボランティアが何をするのでしょうか。黒埼荘に設置した特殊浴槽の利用やあすなろ会が計画している福祉作業所は、ボランティアを前提にしていると聞いていますが。

宗村　特殊浴槽はボランティアの協力がないとうまく活用できません。

菊地　でも今のつえの会ではとても人数が足りません。

宗村　確かに。いまはボランティアに参加してくださいと言うのですら大変です。いずれは、と考えてください。ボランティアの訓練の場になればとも思っているのです。負担感、義務感が生まれてきたら、修正しないといけないでしょう。

菊地　福祉作業所の方はぜひ協力させていただきたいと思っています。

――よくいわれることに、施設のボランティアはできても、在宅は難しいと。事業名にもある在宅にほとんど要望がないというのは。

菊地　まず、他人が家庭に入ることは難しいのです。わたし自身も役場の保健婦としてその家に行くのと普通のボランティアとして行くのでは違いますし、受け入れる家庭もそうでしょう。近所の手前というのもありますしね。

片岡　実はそれが大きな問題でもあるのです。ボランティアをする側よりも受ける側の方にボランティアを理解していただかなくては。

宗村　農村部と新興住宅地では違います。新しい住民はボランティアが入りやすい。農村部の方は門が堅い。まだ始めたばかりだから、在宅の方はゆっくり進めないと。

菊地　相手にとって余計なお世話になったり、プライバシーを侵害したりしないように細心の注意を払わなくては、と毎月、例会のときに話し合ってはいます。

片岡　もし、ボランティアを頼みたいことがあれば、とにかく連絡してほしいと思います。

犠牲という考え方は

――在宅ボランティアの難しさは行政が福祉をどこまで担えばよいのか、という問題に通じるとも思います。たとえば、あすなろ会にしても施設があれば自分たちで作業所を造らなくてもすむわけです。施設に入っている子供もいるのですから。お年寄りの施設も足らないと聞きます。

宗村　施設があればこと足りるわけではないにしろ、施設が追いつかないことは否めない事実です。国県は施設を十分に造る責任があると考えます。高齢化社会を迎え、特にお年寄りは施設に入ることを希望しても、五、六年もかかり、待っているうちに亡くなってしまう場合があります。

片岡　施設には行きたくないお年寄りが多くいても、現実は施設、在宅を選べる余裕はありません。また、施設には中途半端なものもあるのです。

――施設が足らないとか中途半端とかで、その犠牲にボランティアがなってしまったら。

片岡　そんなことはありません。それに、ボランティアが犠牲になるという考え方が悲しい。

菊地　自分にできる範囲でしかやれませんから、犠牲という言葉は適切ではないと思います。ボランティアをする人で、施設の代わりやお役人の代わりに、自分を犠牲にしてする人はいません。ただ、一般の人でボランティアを「自分を犠牲にしてまでやっているのかしら」と特別視する傾向があると思います。

あくまで自発的に、お手伝いできる範囲で
ボランティアと呼ばれないボランティアも
行政の肩代わりとか負担や義務ではない

菊地さん　片岡専門員　宗村課長

教育の役割は大きい

宗村　福祉やボランティアは心の問題が大きいのです。施設では解決はできません。地域や家庭でこそ考えてほしいこともあります。たとえば、児童公園が町内に十五か所ありますが、ほとんど草ぼうぼう。町が管理していますから町が草刈りをすればいい問題ではあるのですが、果たしてそれでいいのでしょうか。地域の人たちの手で自分たちの子供の遊ぶ場を管理できないものでしょうか。

片岡　教育の役割も大きい。ボランティアをする心、受け入れる心を育てないと。先進地の社会福祉協議会では、保育園で福祉を教えているのです。

菊地　わたしも今のところは福祉の勉強で手いっぱいです。ボランティアという言葉が、ボランティアとそうでない人を分けてしまっているのかもしれませんね。

片岡　花と緑の会のように道端に花を植えることも、ゴミを拾うことも、人に道を教えることもボランティアだと思います。ボランティアという言葉にこだわる必要はないと思うのです。

時間がかかっても…

――黒埼町のボランティアは始まったばかりで、試行錯誤の段階です。期待も不安も大きいと思います。今後の展望はいかがでしょう。

菊地　視察した三和村では、村長さんが先頭に立ってやっています。福祉に力を入れる町は伸びると思います。わたしたちも微力ながらお手伝いしていきたいと思います。言うなれば、今年はボランティア元年です。すべてこれからです。

片岡　社会福祉協議会は住民と同じ視点にいたいと思います。上に立ったらおしまいです。その前に社協の存在を知らない人が多いようですし、知っていても募金を集めるところと思っている人もいるようですので、社協自体をPRして活性化させたいです。住民と役場の間をつないでいきたいと思います。

宗村　在宅福祉事業で県から補助金がくるのは二年だが、福祉は二年たったらできるものではない。町は今後もボランティアを援助します。十年はかかると覚悟しています。役場がお金を出して、実践は社協になると思います。社協の人員、事務所などを町長と話し合っているところです。いい方向にいくでしょう。時間は多少かかっても多くの町民の協力を得て、福祉を前進させたいと考えています。

つえの会では、お年寄りや体の不自由な人を集めて、リハビリと娯楽を兼ね、ひな人形作りをしました（7月31日　ふれあいハウス）

社会奉仕の日 善久老人

善久老人会では毎月一回社会奉仕の日を決めて活動しています。ほかの老人会でも空き缶拾いや草取りなどの奉仕活動をしています。